

広津和郎論

——初期作品に見られる性格破産者について——

橋本雄二

〔一〕

広津和郎は最初、評論家として出発したが大正六年十月、「中央公論」に「神経病時代」を發表して作家に転じ、以来「松川事件」の今日までほぼ五十年近く作家生活を続けている。

ここでは広津和郎の五十年近くの作家生活の中で、大正六年の「神経病時代」から大正十年の「感情衰弱者」頃までの初期の作品を問題にしてみたい。その時期が広津和郎の作家活動の中でもつとも密度の高い、集約された時期であると思うからだ。いうまでもなくこの時期における広津和郎の作品の主題は、性格破産者の悲劇であるが、性格破産者とはいつたい何者であろうか。「ロシア文学や二葉亭の作に登場する余計者の後裔」であり、「資本主義文化に引裂かれた人間像」というのは文学史の定説となつているが、この性格破産者は広津和郎のいかなる意識構造によつて生成せられたものであろうか。作品を通して

広津和郎論

性格破産者の実体を明確にさせながら、広津和郎の文学主体と関連させて考えてゆきたい。

〔二〕

広津和郎の文学的出発は同人雑誌「奇蹟」（大正元年九月～二年五月）への参加に見られるが、その文壇的出発は大正六年の「神経病時代」におくべきであろう。それから「師崎行」「やもり」「死児を抱いて」「波の上」「感情衰弱者」などを書いた四年間の初期作品に見られる傾向は、広津和郎自身も言うように「性格破産者」ということばで概念化させることができる。^{註(1)}
「性格破産者」とは広津和郎のことばによると、「罪と罰」の老官吏マルメラドフのような人間、つまり「性格の破産にあつて、神経の暗示のままにべらべらと紙のように動いている」人間である。善人ではあるが、気が弱いゆえに思惟しながらも行動に移すことができず、それゆえに不幸な人間である。^{註(2)}^{註(3)}

二七

この性格破産者を明確にするために作品を見てみよう。

「神経病時代」(中央公論 大正六年十月)の鈴木定吉は御用新聞の見習記者をしているが、「周囲の何も彼もがつまらなく淋しくて、味気なくて苦しかった」と「憂うつに苦しめられてゐる」人間である。彼の憂うつ第一は家庭であつた。鈴木定吉は半年ほど前から女と同棲しているが、同棲する前に一人の男の子が生まれてゐた。彼はその女と別れようと思うのだが、それがどうしてもできない。「あんな女とは別れてしまふのだ」といつも思案しながらも「がどうして別れる、子供をどうする?」という考えがすぐ後から出てくる。が、結局何もできずに不幸な生活をすると続けている。そして「何のために、何のために」とたえず自問する。彼には正義心はあるのだが、無力ゆえに虚偽の生活から脱出することができず、苛責だけがつねに残る。彼は「物事に対して意見と言ふものを持つてゐなかつた」、「唯個々の物事を雑然とその弱いハートに感じはする。しかしそれを統一したり、総合したり、それを一個のまとまつた彼自身の意見としたりするには全く力が欠けてゐた」のである。また「彼の神経にはまるで一つの方向が与へられたかのやうに、一寸した刺戟を受けると直ぐにもその方向に向かつて、彼の理性はそれを否定するのに、それなのにどうしても、さうならずにはゐられない苦しい方向に向つて進み始める」のである。つまり何者かの暗示により行動する性格破産者なのだ。

広津和郎は「神経病時代」について、岩波文庫本のあとがき

に次のように書いてゐる。

私がこの小説の主人公に特に弱い性格を選んだとゐる事には、一つの理由がある。その前項にはトルストイが流行し、最初はその精神的なストインズムが青年を感動させてゐたが、その中にその精神的といふ点だけが残り、ストインズムの方はどこかに消へて行つてしまふと共に、次いでベルグソンなどが流行して、創造の哲学、生命の哲学に青年は有頂点になり個性の無限の生長を唱へながら、その性格が事に當つて実行力がなく、忍耐力がなく、甚だ頼りないものである事が感じられてならなかつたのである。……つまり「インテリの弱さと脆さ」といふものがその当時から私に氣になつてならなかつたのである。……その生命の無限の成長とか個性の強さとかいふ事が最も盛んに人々によつて唱へられてゐた当時の風潮に私は多少揶揄的な氣持もあつて特に弱い性格の人間を選び時の風潮と反対のものを書いてみたかつたのである。このやうに人道主義流行の当時の社会への一批判として性格破産者の悲劇を採りあげることがこの小説の狙いだつた。

人道主義の流行とはまつたくうらほらに「個性の無限の成長を唱へながら」「実行力がなく、忍耐力がない」弱体化した人間の充満している現実への批判として、この作品を書いたと広津和郎は述べてゐるが、この「神経病時代」の書かれた大正六年は文壇では人道主義を標榜する白樺派の全盛であつた。この時期を代表する白樺派は自然主義文学の無理想無目的物質主

義的世界觀に對し、広津和郎が述べているように「個性の無限の成長」を唱えた。當時、「トルストイ研究」^{註6)}などという雑誌が出ていたことでも、いかに人道主義が風靡していたかをうかがうことができる。しかし「白樺派の文学者たちの物質的基礎は明治の終りから大正の初めにかけての『ブルジョアジー』である。この階級は第一次世界戦争を通じて、特殊な形で上昇期をたどつていた。もう少し厳密に言えば彼等は二代目の市民であり一代目の父祖たちが明治時代にたくわえた遺産で生活をまかなつていたのである。食うに困らぬ人たちではあつたが、そのため、怠け者の生活のなかに自分の理想をうずめてしまふには余りに健康な生命力にあふれていた。恵まれた環境のなかから生じた積極的な生活態度が強い特色であり、その人生觀は楽天的な色彩が強かつたのである」^{註6)}が、それゆえに現実の苦難と遊離したものになりがちであつた。広津和郎はいち早くその思潮が薄つべらな表面だけのムードであることを察知した。このことを広津和郎は「二人の不幸者」^{註7)}の序でも述べている。

昔から性格の弱い人間はいつの時代にも必ずあつたに違ひない。それは何も現代ばかりの特産ではないに違ひない。けれどもその性格の弱さが現代ほど複雑極まる形を取つて現れてきた事は我日本では今までに例がないであらうと思ふ。一部の人人々、文学者乃至思想界にたゞさはる人々の間には盛んに人格の統一が唱へられ生活力の成長が主張されているが併し彼等の唱へ彼等の主張している言葉を文字通りに直ぐそのま

ま信用することはかなり危険であると言はなければならぬ。實際において具体的にその言葉を証明してゐる人格は残念ながらその主張者の間にも至つて少いからである。いや彼等の多くが叫んでゐるその言葉の調子の底には、主張してゐる言葉の意味を裏切るところの余りの神経性の焦燥と余りの反射運動の短氣とが感じられるとさへ言はなければならぬ、：：が仮に一歩ゆずつて彼等文学者乃至思想界にたゞさはる人々の主張や言葉を文字通りに信じて彼等だけは此恐ろしい性格の破産からまぬがれてゐるといふ事をゆるすとしても、現代の日本の彼等以外の一般の青年の傾向がその性格の強さを日一日と失つて行きつつある事実を否定するわけには行かない。私はこれらを恐ろしい事であると思ふ、此人生に彼等の要求をも、目的をも持つてゐない青年が次第にふえてくる。末梢神経に与へられた刺戟のまにまに唯動いてゐる青年が次第にふえてくる。又或者は此人生に要求や目的を持つてゐてもその要求を実現し、その目的を完成する力が全然自分に欠けてゐるといふその無力の自覚のために言ひようのない悲しみの淵に沈んでゐる。……かういふ性格の破産の状態がどこからきたか、さうして又かういふ性格の破産の状態を如何にすべきか。これは現在の日本にとつて最も重要な問題であると思はれる。

「二人の不幸者」は氣の弱い二人の青年、壺崎と押川の悲劇を書いたものであるが、これについて広津和郎は「壺崎と押川

とは普通の意味において善良であるし、所謂悪い事などしようとする意志は少しも持つてゐない。けれども、此現代社会の汚濁の波の中を切り抜けて彼等の生存の意義を見つげるには二人とも余りに弱過ぎる。二人は考え方も相違し趣味も相違し、又性格の方向も相違してゐる。併しその底力の欠如は変らない^(註)と述べている。ここでも広津和郎は「神経病時代」のあとがきと同じく、「性格破産の状態がどこからきたか、そして又こういう破算の状態を如何にすべきか」は「現代日本にとつて最も重大な問題である」ことを確認し、この問題への憂慮が広津和郎の創作動機であつたことを述べている。

大正八年四月に発表された「死児を抱いて」も「神経病時代」や「二人の不幸者」と同じく性格破産者をあつかつている。よし子という家庭教師のその雇主にあてた回想の手紙形式で語られるこの作品は「神経病時代」の命題の延長線であろう。「日本では理想主義といふものが妙に軽蔑されてゐるが併し僕は純然たる理想主義者です。」「此世の不完全と醜惡とから一步一人類を救ふ、そこに今後の人類の使命があるのです。」と言つて「あの人」はよし子が交渉を求めた時、よし子の「感情に向つて」「満足を与へる答へ方と態度とを取つた」にもかかわらず、「あの人」は後になつてその時のことを「自分は魔がさしたのだ」「自分の頭にいつものあの霧がかがつたのだ」「自分の頭の支配を失つたのだ」と言いわけをしている。そしてよし子が「あの人」に妊娠したことを告げた時も、「あなたにはほんと

うにお気の毒なことをしました」と憐憫の感情を抱いても一カケラの愛情すら示さない。「自分はほんたうに清きものを犠牲にしたのだ」と自責しながら、この問題の解決を「かうなつた以上は自分の努力は唯ひとつしかない。どうかしてY(よし子)を愛さうとすることだ」と考える。しかし「あの人」はよし子を愛すること以外に「自分を救ふ道はない」と問題の解決を愛することにあると意識しながらも、どうしてもよし子を愛することができない。「あの人」が病床にあつていままさに死のうとする時にも、よし子の「どうか私を愛して」と一言言つて下さい」といふ悲痛な願いにもかかわらず、「あの人」は最後まで「愛する」といふことを言わない。

この「死を児を抱いて」に対して大正八年に菊池寛はモラリツクな批評を与えている。

私は貴下が人生を覗る目と之を描き出す技倆に対しては何時も敬意を払つて居ます。が、さうして描かれた人物の性格なり態度なり行動なりに対して同感もしなければ同情も出来ないのです。「かう云ふ人間が居る以上仕方のない事で夫をそのままに描出するより外にはないと」貴下は考へて居られるやうです。私の考へ方は少し違ふのです。例へば今度の死児を抱いての主人公が、女主人公に対して死際までも只一言「愛する」と云ふ事が云へない。……私はあの態度が如何にも不快なのです。只一言主人公が「愛する」と云ふ嘘を吐く事に依つて一個の女性が永久に幸福であり得るにも拘はらず、換

言すれば自分が傷つけた女性を更に犠牲にして迄も、自分の正直さそれは利己的な人生において最も有害な正直さだと思ひます。——を頑守して行く所が私には堪へがたく不快なのです。もう一つ私があの人公に対して嫌たらないことは、あの人公が二年に近い間ある女性と同棲して、その間に一度も愛が湧かないと云ふ事が私には如何にも非人間的に思はれるのです。無論二人の男女の間には、愛情の盛衰消滅はあるでしょうが、二年も同棲して居ながらその間に一度も愛が起らないと云ふ事は私には何うにも考へられません。若し又實際愛が起らなかつたならばあの人公に重大な性格上の欠陥か、でなければ容貌上の欠陥がなければならぬ筈です。然るにあの「死児を抱いて」の女主人公は私には可憐な愛すべき少女のやうに思はれます。あんな可憐な少女を二年の間同棲しながらあの人公に対して少しの愛も感じないやうな男は私は何うも私などとは同じ感情を持つた人間とは思ひ得ないのです。(広津和郎氏に「早稲田文学、大正八年五月」)

この菊池寛の批評は当時の読者の意見を代表するものであつた。⁹⁾この菊池寛の批評に対して広津和郎は、「神経病時代」「死児を抱いて」についての「作者がある事件を如実に描く丈でそれに対する作者の肝心な真面目な考へは作品に出てゐない」という批評に、あまり「無理解だ」と答え、続けて『「神経病時代」にしても『二人の不幸者』にしても、菊池氏の作物のやうに、ある事件を描いた後に、びつたりとそれの解釈を下して置

くやうな事はしてない。解釈は読者の心に任せてある。けれども、作者は読者の心に或問題を提供してはゐる。その問題を提供すると云ふことが既に『ある事件を如実に描く丈』の作者の目的とは異つてゐる筈である」、そしてこれ等の作品の主人公は「精神的な意味で、現代が生んだ不幸な人間だと私は思つてゐる。過渡期時代に生れた無力者である」、だから作者自身もかならずしも「彼等に同感を持つてゐるわけではなく」「作者は彼等に同情を持ち、愛を持ち又嫌悪を持ち時には憎しみさへをも持つてゐる」と述べてゐる(菊池寛氏に其他「早稲田文学、大正八年六月」。菊池寛が人間の道義観を問題にしたのに対し、広津和郎は作家の態度、表現方法というようなものを問題として、菊池寛に対するはつきりとした反論はなされてゐない。

たしかに「あの人」は非人間的で醜いエゴイストである。死際までも「愛する」と言わなかつた「あの人」の態度は、菊池寛の言うやうに普通の人間とは「同じ感情をもつた人間とは思へない」と言われる種類の人間であるに違ひない、広津和郎自身も彼等を「同情を持ち、愛を持ち又嫌悪を持ち時には憎しみさへ持つて」見てゐるのであるから、彼等の存在をそのまま肯定してゐるわけではない。むしろ「どうしたならばああいふ性格の人々がその悲しみや苦しみから救はれるか」とたえずその救いを求めているのである。

しかしここにひとつの疑問が生まれる。「自己とその周囲に関心をもちたすにはゐられない」(散文芸術の位置)新潮 大正一三

芸新辞典」明治書院、昭和二年五月発行

註(5) 「トルストイ研究」は大正五年九月創刊、大正八年一月廢刊。

註(6) 荒正人「大正文学の展望 近代文学の成熟」(小田切秀雄編「講座日本近代学史3 大正文学」第一章大正文学(1)——人道主義と社会主義十頁)

註(7) 「二人の不幸者」は大正六年五月から読売新聞に連載。

註(8) 前記「二人の不幸者」序大正七年十月。

註(9) 「広津氏に対する公開状」(新潮)大正八年八月

〔三〕

片岡良一は広津和郎に性格破産の人間群像を創作せしめたものとして、広津和郎が「自分の周囲に見出し」性格破産者の幻影に他ならないと述べている。また平野謙も「広津和郎をしてそのような独自性をあがなわしめたものは何か、それこそ『やもり』『師崎行』『静かな春』『波の上』一系の作品に描かれた当時の作者自身の生活環境に他ならない」(「現代の作家」青木書店、昭和三年五月一日発行 二二頁「広津和郎」と述べている。たしかに生活環境もその一因であろう。

これ等の私小説ふうに書かれた作品を通じて、広津和郎の生活環境と意識を見てゆきたいと思う。

広津和郎自身が『やもり』『波の上』等はこの時代を書きたるものなり」と自ら語る大正四年は「入社後半年にして毎夕新聞退社、専ら翻訳によりて生計を立つ。愉快ならざる結婚生活

年九月) 広津和郎の視線は、これ等の人間の存在をとらえたわけであるが、広津和郎が「現代日本で一番憂ふべきものは性格破産である」(「二人の不幸者」序)と警句しているように、当時における日本人の意識形態を簡単に「性格破産」と規定するのは少し乱暴ではないかということである。白樺派の思想が現実的に空虚なものであつたとしても、「末梢神経に与へられる刺激のまにまに唯動いてゐる青年」や「要求を實現し、その目的を完成する力が全然自分に欠けてゐる」という人間は、その時期を代表するほどの圧倒的多数であつたらうか。ここに性格破産者を一般化しようとする広津和郎の特異な姿勢が見られはしないだらうか。ここに広津和郎の文学主体を説明するカギがあるように思われる。

それではなぜ、広津和郎は性格破産者の普遍化を試みようとしたのだらうか。次に広津和郎の意識が問題とされねばならぬ。

註(1) 「神経病時代」あとがき、「二人の不幸者」序などに述べられている。

註(2) 「神経病時代」で述べている。

註(3) 「アルツイバシエフ論」早稲田文学、大正六年五月。

註(4) ギリシア・ストア学派により説かれた哲学。哲学を実生活と引きあはせて密接に結びつけ、哲学は実践上の知恵を教える学、倫理生活を律する諸原理に関する学であるとした。従つて義務至上主義、克己禁欲主義、博愛的世界主義等をその内容とする。(丸山林平「文

に入る。最も心暗き時代始まる」そして大正五年には「茅原華山主宰の『洪水以後』^{註⑥}」に文芸時評を書く。森田草平・生田長江らに認められる。大正六年五月に早稲田文学にアルツィバシエフ論、十月に正宗白鳥の紹介で「神経病時代」を中央公

論に、十一月に「本村町の家」、大正七年一月に「師崎行」、五月に「二人の不幸者」、大正八年一月「やもり」、四月「死児を抱いて」「波の上」などをやつぎばやに発表している。大正八年は長女が生まれ、「家庭生活益々円満を欠き家を外にして放浪の生活をおくる」時代であった。性格破産者を主人公とする「神経病時代」「死児を抱いて」が「最も心暗き時代」「家庭生活益々円満を欠き、家を外にして放浪生活送る」時代に書かれたことは「散文芸術は人生のすぐ隣りにある」(散文芸術の位置)「新潮」大正二三年九月)と言う広津和郎の自己の生活、あるいはその周囲に取材したことの証明であろうが、年譜と作品を比較してみると時間的なずれは多少あるとしても、事実がそのまま作品に投影されていると言えないだろうか。これ等の作品の中で「師崎行」「やもり」「波の上」はきわめて当時の広津和郎に接近しているものとして三部作と言われている。

これ等三部作の制作年代は前記のとおり、大正七年一月に「師崎行」、大正八年一月「やもり」、四月「波の上」であるが、実際の広津和郎の生活に即していえば「やもり」「師崎行」「波の上」の順序である。この三部作はいずれも愛のない女と不用意に結婚した男の結婚生活の苦悶を書いた陰気なじめじめした

世界の記録であるが、「やもり」(新潮)大正八年二月)ではその生活が、毎夜階段の薄暗い壁の隅に出てくる二匹の「やもり」に自分の生活を象徴させている。

主人公は同棲している女と正式に結婚しようか、別れようかと迷つて「何の統一も何の光明も、何の目標もない」生活を送っている。しかし「中間に人を入れて、それで以て世間並の解決をつけてしまふやうな、そんな方法は取りたくない。自分のしたことは飽まで自分で処理したい」という道義的責任感が離婚することをばんでいた。しかしこの「卑怯なことを決してしたくない」という道義的責任感も「むしろ自分自身に対して張つた意地と云つた方が、適切であるやうに思はれる」「つまり主人公の本心は「結婚しようとする解決とは、全然反対の方へ走つてゐた」のである。女と別れたいという気持ちがあまりに明瞭でありすぎたために、「その本心の思つてゐるがままに行動するのは、何ほ何でも余りに勝手気儘に過ぎるやうに思はれた」のである。しかし「真に愛せず罪を犯した」という罪の意識は主人公をして結局「別れてしまふわけには行かない」と考えせしめる。そして主人公は「死児を抱いて」の「あの人」のように「自分のしなければならぬ事はたつた一つしかない。つまり、今から改めて彼女を愛さうと心掛ける事だ！」という考えに到達する。それには「意志だ、意志の力だ、意志の力によつて何処までもやつて見なければならぬ」と意志の力によつて自分の心を克服し、女を愛せようと努力する。しかしそのことは主人公

にとつて「無限の坂道を、自分の身体よりも重いものを背負つて、昇らうとする事に外ならなかつた」のである。そして主人公はこれ等の苦痛から逃れようと「浮世のまゝにならぬと云つたやうな、悲しい厭世的な味の漲つてゐる」義大夫へ一月に二十三日も聞きに行つたりする。しかしそんなことで問題は解決しない。そこで思案のあげく、愛知県知多半島の先端、師崎に静養している父のところへすべてを打ちあけに行こうとする。

「師崎行」(「新潮」大正七年一月)は「やもり」の後を受けて、主人公が父にすべてを打明けようと師崎に行くその旅の途中でのさまざまな精神的苦痛を描いている。主人公は女を愛し結婚するのが当然だと思ひながらも、結婚後に「愛さうとする私の努力が効を奏しなかつた時、今よりも一層悲惨な状態」に陥いることを恐れる。が、「蒔いた種子は自分で」という論理で「結婚するより他はないといふ結論」に追いやられてしまう。

「波の上」ではついに「動けば足がもぐつて行くあの泥沼が想像される。もがけばもがくほど、足から腰から、身体全体がその中にもぐつて行く。そこから逃げる道が解らない。動かすにちつとしてゐて見る。動くよりももぐり方が多少遅いが、やつぱり少しづつもぐつて行く」とどうにもならない人生のジレンマに陥り、とうとう家庭から逃げ出して放浪する。

なぜにこの三部作の主人公はこのように苦しまねばならないのであろうか。それはもちろん彼女を愛せないことにあるのだが、それではなぜ主人公はその女を愛することができないのだ

らう。

「やもり」では主人公は「彼女が身だしなみを少しもしないで、着物をぐずぐずに着て、短い髪を無造作にちよこんと束ねてゐる恰好を見ながら、もう少しどうかしたらよさうなものだ」と、そういう些細なことにも「軽い嫌悪の情」を呼び起している。しかしこんなことはたいして問題になることではない。「師崎行」では彼女が主人公の仕事に対して「何の理解も同感も持つてゐないこと」や「彼女が我儘で、柔順でなくて、やもするとその母に対してさへも楯つく」こと考えてみるが、主人公自身そういう理由をいくらかぞえたても「それで以て私が彼女と結婚しない方がいいとは、どうしても、私の心の或ものが承認しなかつた」と考える。この場合の結婚しない方がいい理由はそのまま愛せない理由と考へていいだろう。この三部作の主人公は前にも述べたが「私は自分がやつぱり作家とその背後とを別々にしてみることのできない」(「一本の糸」昭和一四年九月作)広津和郎自身と見ていいであろうが、これ等の作品は平野謙の言うように「最も心暗き時代」の「苦悩のどん底で、人性の不条理に直面しつゝ、作者は実生活のカタルシスをあらゆる角度に模索した」のであり「作者が実生活に希つたひとつの救援が文学化」されてるのである。だからこそ「苦しまぎれに作者は性格破産者という人間典型の発明にまで強いられざるを得なかつた」のである。^(註5)つまり広津和郎は自己の生活の苦悩を文学化し、その解決を模索する中で苦しまぎれに性格破産者

という人間典型を發明したわけだが、そのことによつて決して現実の問題は解決していない。愛のない女との結婚生活の泥ねいから脱出するという直面する問題の解決を保留してしまつてゐる。そのみか性格破産者を發明しようとする広津和郎の態度には、そのジレンマの中の自分の存在を性格破産者という人間典型で正当化しようとする側面さえうかがわれる。

註(1) 片岡良一「広津和郎論」(現代日本文学全集32 広津和郎 字野浩二集一筑摩書房 昭和三十年十二月四〇二頁)

註(2) 「現代日本文学全集32 広津和郎 字野浩二集」筑摩書房、の巻末の年譜より引用、この年譜は「改造社版『現代日本文学全集』

第四十八篇(昭和四年刊)所載の年譜及び各種文芸年鑑を参照し、更に著者の口述を合わせて、山本容朗氏の作製に成る」もの。

註(3) 「洪水以後」は大正五年一月創刊、七月に「日本評論」と改名。
註(4)(5) 前記、平野謙「現代の作家」青木書店

〔四〕

次に性格破産者の幻影を自己の内部に持つ広津和郎の意識構造が問題とされなければならない。どうして広津和郎は愛情のない結婚生活に終止符をうち、あつさりと別れてしまわなかつたのだろうか、また性格破産者という人間典型は純粹に広津和郎の意識から発想されたものであろうか。

広津和郎の意識構造を明らかにするひとつの方法として、広津和郎の文学的出发点を問題としてみたいと思う。

広津和郎はその当初において広津自身も言うように、正宗白鳥の作品に触発されて文学への道を志向した。正宗白鳥の「絶望否定の底」や「靈魂の叫び」に広津和郎は親近感を覚えたのである。つまり正宗白鳥のニヒリズムが広津和郎の眠れる文学的意識をかりたてたと言えよう。また広津和郎は二葉亭四迷の「浮雲」を読んでこの作品から与えられた感動が「私を文学に導く最初の土台を作つた」(二葉亭のリアリズム)ことを述べている。広津和郎の文学的出発に際して、二葉亭四迷と正宗白鳥の文学に示唆されたことは、広津和郎の以後の文学活動に顯著にその影響が見られることから、広津文学の決定的な礎石となつたと言える。しかし二葉亭や白鳥ばかりでなく、広津和郎は二葉亭や白鳥のむこうにある十九世紀末のロシア文学に多大の影響を受けている。それは早稲田大学の卒業論文に「チェホフとアルツイバンシェフ」を書いたことでもその一面がうかがわれるが、大正四年に書いた「チェホフの強味」はそのまま広津和郎自身の将来の文学的活動の路線を暗示していたのではなからうた。トルストイがチェホフは一個の写真師に過ぎないと批評したことに、チェホフを弁護して「チェホフの眞の偉さは範疇を作らなかつたといふ点にある。彼は人生を円の中にも角の中にも入れ込もうとはしなかつた。彼は人生を愛した。併し彼は賢明であつた。彼は人間の喜劇をも、悲劇をもあるがままに見た。それ等のどん底までも解剖し而もそれを常に愛を持つて描いてゐた。」そして「チェホフが到底救ふことの出来ない、ロシ

アの消極的廢滅の病原菌として発見したものは、社会状態の不幸ということでもなければ政府の圧迫ということでもなくもつと根本的な性格の破滅ということであつた」と指摘したことを賞讃している。また広津和郎はチェホフの魅力を「チェホフの幽霊」と名付け「臨終に思い出す作家」であり、「亡び行く時代をどうするといふようなさういふ積極的な動き方はせず、静かに挽歌を歌つてゐる隠者の姿である。人の命の儂さと人生の徒勞とを説いてゐる世捨て人の姿である」とまで言つてゐる。このチェホフの姿はそのまま広津和郎の姿とは言えないだろうか。

「僕は範疇を欲しない。むしろ範疇の誘惑を怖れる」と言い、菊池寛の批評に対して「菊池氏の作物のやうに、ある事件を描いた後に、びつたりとそれの解釈を下して置くやうな事はしてない。解釈は読者の心に任せてある。けれども、作者は読者の心に或問題を提示してはゐる」という広津和郎の態度は、チェホフの「人生を円の中にも角の中にも入れ込まうとはしなかつた」態度そのものである。ここにチェホフの思考、方法が深く広津和郎の意識の内部に入り込み、チェホフの目で見、チェホフの耳で聞き、チェホフの心で考える広津和郎を発見することができる。広津和郎はまったくチェホフの幽霊にとりつかれてしまつていたと言えよう。

広津和郎が自然主義文学により教養されて、人間の真実と人生の真実とを文学において再生することを試みようとした時に、「人間の喜劇をも悲劇をもあるがまゝに見て」「それらのどん

底まで解剖して描いた」チェホフの存在は広津和郎にとつて、それは行動の指針となつたのであろう。従つて性格破産者という人間典型は広津和郎の意識の中で「チェホフの幽霊」によつて明確なイメージをもたられ、そこに現実生活の相剋があり、広津和郎は自分を性格破産者と規定することにより、あるいは性格破産者とカムフラージすることにより現実生活の問題の解決を回避し、性格破産者という人間典型を普遍化しようとしたのではなからうか。

しかし広津和郎がチェホフを代表する一九世紀末のロシア文学のメガネを借用して、当時の日本を見た時に、そのメガネの度はまったく日本の社会状況にびつたりとあつたものであつたろうか。

チェホフがロシアの消極的な廢滅の原因として「社会的不幸といふ事でもなければ、政府の圧迫といふことでもなく、もつと根本的な人間の性格の破産」(「チェホフの強み」というのをそのまま日本に移植して「現代日本で一番憂ふるべきは性格破産者だ」(「二人の不幸者」序)と言うのはかなり乱暴なことではなからうか。当時のロシアの社会状況を佐々木基一氏のチェホフ解説から引用してみよう。当時のロシアは「一八八一年のアレキサンドル二世の暗殺を頂点として、七十年代のインテリゲンチヤの心をとらえたいわゆるナロードニキ(人民派)の運動が内部からも崩壊し、また外部からの徹底的な弾圧をこうむつた反動期であつて、……反動政治家のもとで、言論の自由は制限さ

れ、進歩的な人々は片はしから投獄されたり、流刑に処せられたりした。七十年の人々の心を揺すぶつた大きな理想はもろくもくだけ、幻滅とそれに続いて無気力と無関心とがやつてきて、人々は暗憚とした日々のなかで、積極的な行動を失つていつた」という時期であつた。この十九世紀末の革命を前にした帝政の頽廢期と二十世紀初頭の日清、日露、第一次世界大戦を通じて日本資本主義が高度に發展してくる日本の社会状況とはかなり違つてゐるはずである。

ここにチェホフのエピゴーンのなあまりにチェホフかぶれしてゐる広津和郎の一面が見られよう。

浅見淵は広津和郎の「絶望的虚無的な気持」は「時代が余儀なくした切迫した本当のそういつたものではなく、時代の空気とは遊離した多分にローマン味を孕んだそうしてあくまで気分的な一九世紀末のロシア文学耽溺の結果によるそれである」とはつきりときめつけてゐる。そしてそうなきしめた条件として「都会育ちの内気な性格と生得の敏感で感じやすい性格」をあげて、「当時にあつてはむしろ意識的、あるいは人工的とも言える。そうした絶望的な気持——いや気分にも殊更極まつていつたのだ」と述べてゐる。中村吉蔵が広津和郎の少年時代を「顔の表情に憂鬱なところがあつて」「神経質な敏感な少年であつた」と回想してゐるが、その「神経質」で「敏感」な性格がチェホフにひきつけられたと考えるのはうなずけることである。それに八歳の時、結核で亡くなつた母の体質を受けて、体の弱

かつた広津和郎が、結核で死を直前にしてゐたアルツイパシエフに興味以上のものを抱いたのは当然のことであろう。

しかし広津和郎のロシア文学への急速な接近を広津和郎のそれ等の生理的諸条件にのみ帰するのは早計ではないだろうか。前にも少しふれたがやはり当時の文壇の思潮も考えてみなければならぬ。広津和郎の作家的胎動期の明治の終りから大正の初期は自然主義文学が行きづまりをみせ、その亜流とも言うべき耽美派文学、享楽派文学が横行し、それに人道主義を掲げる白樺派が抬頭してきつた時期であつた。

浅見淵の広津和郎に対するこの批評はたしかに広津和郎の側面を鋭く突いていよう。が広津和郎の苦悶というものが浅見淵の言うようにまつたくの気分的な実体的ないものであつたらうか。たしかに一九世紀末ロシアと二十世紀初頭の日本の状況を同一視して、性格破産者を普遍的な人間群像であると規定してゐるところに、いささかの誇大感はある。が広津和郎の苦悶が全面的な気分的ポーズとしたら広津和郎は小説を書きながらニヤニヤ笑つてゐることになる。相馬泰三が広津和郎を評して「彼はよくがら／＼と荷車を曳つぱつて歩いてゐる」と書いてゐるが、その荷車の上には荷物は何も無いことになる。しかしそんなことは作品の上からも、日常生活の密度の上からも考えられない。やはり広津和郎は真に苦悶してゐたのである。チェホフによつて教えられたものであつたとしても、もはやそれはチェホフを離れ、広津和郎の内部に多少とも血肉化されてゐる

と考えるべきではなからうか。

註(1) 広津和郎「正宗白鳥小論」(作者の感想) 大正九年三月発刊
所収。

註(2) 「チェホフの幽霊」ということばは「わが心を語る」(改造)
昭和四年六月)に見られる。

註(3) 「菊池寛氏に、其他」(早稲田文学) 大正八年六月)

註(4) 佐々木基「チェホフ解説」(世界文学全集 29巻「チェホフ」
新潮社 昭和三十七年六月発刊、四二〇頁、四二二頁)

註(5) 浅見淵「広津和郎論」(佐藤春夫、宇野浩二監修・編纂「近代
日本文学研究 大正文学作家論」下巻、二四九頁、小学館、昭和十八
年一月発行)

註(6) 中村吉蔵「神経質な少年時代」(「広津和郎氏の印象」「新潮」
大正八年二月)

註(7) 相馬泰三「荷車を曳つばつて」(「広津和郎氏の印象」「新潮」
大正八年二月)

[五]

しかし広津和郎の作品の中に性格破産者とまつたく性質を異にする一連の作品が見られることも注意せねばならない。「本村町の家」「崖」「哀れな犬の話」「お光」などであるが、性格破産者を自己の内部に見出した広津和郎にこれ等のまつたく違つた世界のあつたことはいぶかしく思われる。まずそれらの作品を見てみよう。

大正六年八月に書かれた「崖」(原題・思ひ出した事「新潮」大正

六年十一月は作者が知多半島の師崎に入院している父柳浪を見舞いに行き、一月ほどそこで暮すのだが、そのある日病院の前の岬の上から師崎の町を見おろしている時、後ろの病院から父が作者に手を振る。父は「お前があ岬の上に立つてゐた時、もし眩暈でもしてよろけたら大変だと思つて」手を振つたのであるが、その日父はかなりの血を吐く。医者は激しい運動をしたからと診断するが、作者は「その時の父の出血が、私があ岬の崖の上に立つてゐた時に、余りに父が心配して胸を痛めたゝめではないか」と考える。これは父に対する作者の深い愛情の表われであろうが、この父に対するこまやかな愛情は大正六年十月の「本村町の家」(「文章世界」大正六年十一月)にも見られる。「父と私との心には、昔から一種の不思議な神経が働いてゐた。父の心に宿る暗い影、憂鬱、悲しみなどは、直ぐ私の心に響き初めるのであつた。私は父の顔を一目見ると、直ぐ父の心がどんな方向に進みつゝあるかと云ふ事が解つた。そしてそれがため私自身が憂鬱になつたり、悲しんだり、心が暗くなつたりした。それが直ぐに再び父の心に影響を与へ初めるのであつた。」というほど父と作者との間にはびつたりした心の相関作用というものがあつたのである。

「U君とエス」(「表現」大正二年七月)は獵犬と飼主との愛情を描いたもので、U君の「エスは僕の唯一の家来であり、親友であり、そして少し誇張的な言葉を使へば、何か親身なものでても云ひたいような親しい道伴れ」という気持ちはそのまま

エスの気持ちであった。

大正七年の「線路」(「文章世界」大正七年十月)は円覚寺境内を走る汽車に蛇が轢かれるのを目撃した作者が、そのことを蛇に対する異常な愛情をもつて書いてある。

これ等の諸作は性格の破産者系統の作品とまつたく異なりヒューマニスティックなあたたかさを感じさせる。大正六年頃から大正十年頃までの「最も心暗き時代」「家庭生活益々円満を欠き家を外にして放浪生活を送る」時代において、これ等の諸作が性格破産者の人間典型を自己の内部に見出した広津和郎から創作されたことは非常に不可解なことである。性格破産者系統の作品とそれとはまつたく反対のこれ等の作品とはいかなる位置関係をもつものであろうか。

片岡良一は「作者は無解決な探求にだんだんと疲れて行き……深い疲労と倦怠のとりことなつて」最後におちついた「逃避的な休息の場」として考えている。^{註(1)}しかし大正六年に「本村町の家」、大正七年に「静かな春」、大正八年に「お光」を書いてある時期は、「神経病時代」や「死児を抱いて」を執筆した時期と前後している。従つて年譜を見ても、闘い疲れて最後に到達した「休息の場」ということは言えないと思う。やはりこの世界は、「正直者で、正義派で、そして道徳家」^{註(2)}と言われる広津和郎が作家として出発する以前から素質として持つていた世界ではなからうか、それが「心暗き時代」「家庭生活円満を欠き家を多にして放浪する」という苦悩の時代に相遇し、そこに

新たに性格破産者の幻影が入つてきたのであろう。一九世紀末ロシア文学の洗礼を受けた性格破産者の幻影と、あくまで正義派的なヒューマニスティックな一面とが、同時に広津和郎の意識の中で奇妙な形で同居してしたのである。だからこそ広津和郎は現実生活の諸問題を文学に投影しながら苦しみつつも、また一方ではこれ等のヒューマニスティックな作品を書くことができたのではなからうか。従つて広津和郎が大正九年の「数年悩みたる結婚生活を破壊する」という現実的解決を行なつた時、性格破産者の幻影は広津和郎の意識の中から消え去つてしまつた。性格破産者をテーマとする作品もだいたいそれを期として姿を消している。だから「逃避的な休息の場」ではなく、元來の広津和郎に復帰したと言ふべきであらう。たしかに生活に疲れて「倦怠のところ」になつた時期はあつたであらう。たとえば大正十年三月の「遊戯場」などが考えられる。しかしそれは広津和郎にとつてほんの一時期に過ぎない。

しかしこれ等のヒューマニスティックな作品といつても、人生を讀歌し底ぬけに明るいというものではない。やはりそれは広津和郎が白樺派的理想を持つこともできず、また自己の周辺に不安を感じていたからであらう。

註(1) 片岡良一「広津和郎」(久松潜一監修『日本文学史 近代』)第一章 小説・戯曲 五 早稲田派と後期自然主義 四四七～四四八頁 至文堂 昭和三年六月発刊)

註(2) 宇野浩二「道徳家で苦勞性で」(「新潮」)「広津和郎氏の印象」

大正八年二月

註(3) 前記「三」の註(2)に同じ。

〔一六〕

広津和郎は性格破産者の悲劇を描きながらその性格破産者の苦悶の克服は強靱な意志の力であることを再三再四説いている。性格破産者の悲劇は周囲の環境にその生活を制約されているところから生まれてきているものであるが、「神経病時代」においては鈴木定吉を制約しているものは彼の勤めている新聞社であつた。また「死児を抱いて」ではそれは不用意に結婚した女との家庭生活であつた。それ等の周囲の条件と離反する主人公の意識、正義心のギャップに性格破産の悲劇、苦悩が生まれているのであるが、ここからの脱出を意志の力に求めようとする広津和郎の態度は「人生を再現して能事おわれりとする自然派末流、乃至意志と情熱を欠いた人間性の記録製作のみに没頭している作家」とはかなり異なつていた。広津和郎の作品に出てくる主人公は現実に即してその不条理に苦しみながら、なんとかして閉塞された状況を打開しようと努力している。ここに広津和郎の人生において積極的な態度がうかがわれる。が、それでは広津和郎の現実を把握する尺度は何であつたろうか。それは片岡良一の言うように「良識と人情」^{註(2)}に他ならなかつた。広津和郎は「良識と人情」で現実を見て、「良識と人情」で現実の問題を処理しようとした。そのために強靱な意志の力を必要

四〇

としたのであるがここに広津和郎の思想性の欠如という側面が見られる。「現代が生んだ不幸な人間」「過渡時代に生れた無力者」と言いながら、性格破産者を生み出した歴史社会への究明がなく、単に「現実をみつめて、そこに不安と焦慮を感じる以上のことは出来なかつた」^{註(3)}のである。広津和郎が「範疇を恐れ一て思想を持たなかつたことが結果的には問題解決のメドの立たない迷路に落ちこみ方向を失なつて「動けば足がもぐつて行く泥沼」(波の上)から抜けだすことができなかつたのではなからうか。もし広津和郎が社会構造に対して視線をむけていたら、また違つた作品が書かれたかもしれない。そこまで広津和郎の視線がとどかなかつたというのは、自然主義末期に登場したという時代的背景もあるが、どうしようもない作家的素質の問題でもあるように思われる。

また当時において広津和郎がいはやく白樺派の人道主義が内容のない空虚なものであることを指摘したことは評価されるべきであるが、性格破産者という人間典型は当時の日本の土壌では、広津和郎が警句するほど多くみられるものではなかつた。それを一般的状況であると普遍化しようとする態度には、外国文学に示唆され外国文学の命題をそのまま日本に移植し平然としていいる一部の近代作家のおもかげが感じられないこともない。

註(1) 片岡良一「広津和郎論」(『現代日本文学全集』32 広津和郎・

字野浩二集)所収三九七頁 筑摩書房 昭和三十年十二月発刊)

註(2)(3) 前記「五」の註(1)に同じ。